**鯱**

日本の城の屋根を見てみると、２匹の鯱、虎の頭に魚の胴体を持つ想像上の生き物を大抵見つけることができる。鯱は水とゆかりがあるため、火除けとして取り付けられた。他には水を想像させる波や魚もよく使われる。鯱は屋根の中央の棟の両端に取り付けられ、天に向かった尾びれは特徴ある天守の一部を形作っている。

姫路城の天守は7代に渡る陶製の鯱によって守られてきた。城の屋根瓦のように、鯱も徐々に風雪にさらされて劣化してしまう。ここでは、5代目、6代目の鯱と現行の鯱のレプリカが展示されている。それぞれ設置された時代の名前が付けられている。

**明治の鯱**

この鯱は1910年、明治時代（1868-1912）末期に行われた城の大修理の際に作られた。５代目の鯱として大天守の東端を守ってきたこの鯱と対になる鯱は1950年代と1960年代の大修理の際に西側の対と入れ替えられた。

台座の碑文によると、この鯱は城の西隣にある龍野町で大古瀬市左衛門（年代不明）が作ったものとされている。大古瀬は龍野町に住んでいた瓦師の一家の五代目当主である。

**昭和の鯱**

この一対の鯱は6代目のもので、1956年から1964年の”昭和の大修理”の際に取り付けられた。この鯱は大天守の二階部分で見つかった小型の鯱を原型として作られた。元の鯱には1687年と銘があり、城内で現存する最も古い鯱と考えられている。昭和の大修理の際には最上層の大型2匹を含む合計11の鯱が大天守のために取り替えられた。あなたはいくつ見つけられるだろうか？

**平成の鯱**

2011年11月に新しい鯱２匹が製作され、2010年代の城の大修理の一環として、翌年2月に取り付けられた。職人は損傷に備えて予備の鯱の製作をしていたが、ここに展示されているのはそのうちの一つである。屋根にある鯱と同じ大きさで1.9メートルの高さと３００キロの重さがある。

７代目の鯱は先代である昭和の鯱に忠実に作られた。しかしながら、製陶技術が向上したため、新しい２匹の鯱に開けられた穴の数は昭和の鯱よりも少ない。この穴は焼成時に熱を逃がし、ひび割れを防ぐために必要なものである。